

古文 詩歌

折々のうた

大岡 信

新古今和歌集



講師

畠山 俊

理解を深めるために

■学習のねらい■

春の夜の物語のような歌と古歌を踏まえ、うたうで湖の冬の月を詠んだ歌とを
読み味わう。あわせて「新古今和歌集」について知る。

*

*

*

春の夜の物語を読み味わう

●注意する語句

もる（ラ行四段動詞）…「漏れる」 何かの隙間からこぼれ出てくる様子。

ここは連体形。

ぞーあらずふ……………ぞ（係助詞）+あらずふ（八行四段連体形 結び）強調

●古今異義語

影……………光の意味があります。したがってこの「月の影」は「月の光」の意味です。

●藤原定家の歌

春の夜の 夢の浮橋 途絶えして 峰に分かる 横雲の空

（春の夜にふと目覚め、空を見上げると、山の峰から一筋の横にたなびく雲が離れていこう としている）

この歌は「源氏物語」の最終巻「夢の浮橋」のイメージで作られた歌とされています。

「新古今和歌集」について知る

■「新古今和歌集」

- ・ 八番目の勅撰集 「古今集」から「新古今集」までを八代集と呼ぶ。
- ・ 一一〇一年 後鳥羽院の命が下る。一二一〇年にはほぼ完成した。
- ・ 二十卷。一九八〇首。
- ・ 選者 源通具、藤原有家、藤原定家、藤原家隆、藤原雅経、寂蓮。
- ・ すべて 短歌形式。
- ・ 仮名序、真名序がつく。
- ・ 「万葉集」「古今和歌集」「新古今和歌集」を三大歌集と呼ぶ。

国語総合

第 52 回

受け継がれる伝統を理解する

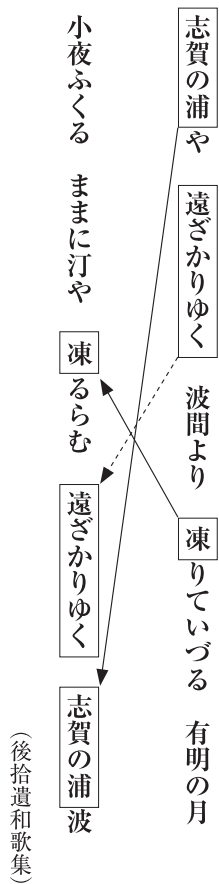
● 注意する語句

志賀の浦……現在の滋賀県大津市付近の琵琶湖の湖畔。

有明の月……夜が明けても空に残っている月のことを指しますが、ここでは一五日以降の月の出が遅くなつてからの月をいいます。

● 和歌の技法

本歌取り……元になる古歌があり、その歌の言葉などを取り入れることであつた歌の間には関連性があるときづかせたうえで、何か新たらしい要素を加えて歌の世界を広げていく技法。余情を伴った奥深さを感じさせます。



「後拾遺和歌集」の歌では足元から湖が凍っていくので、波音が遠ざかつていくのを耳で聞いて夜がふけていく寒さを表現しています。「新古今和歌集」の歌はそれを月の光の射し方を目で見るにより感じたことを歌に表現しています。言葉の関連性のうえに、聴覚から視覚へという新しい感覚に変えることで歌の世界が広がっています。

■ 新古今和歌集 ■

梅の花にほひをうつす袖の上に軒もる月の影ぞあらそい

藤原定家ふぢらのさだいえ

【卷一 春歌上】

現代語訳 梅の花の香りが移っている袖の上に、軒から漏れてくる月の光が（春の美しさを）争うように射していることだよ。

志賀の浦や遠ざかりゆく波間より凍りていづる有明の月

藤原家隆いへたか

【卷六 冬歌】

現代語訳 志賀の浦よ。（岸边から凍って）遠ざかつていく波の間から凍つたように鋭く青白く出てくる有明の月よ。